

## 大震災の時代 はじめに

(五百旗頭 誠：大震災の時代、東京、毎日新聞出版、2016 7-22)

2018 年 7 月 27 日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

### 1. 「三大震災」の視座から

我々は思いもかけず「大震災の時代」にめぐり合わせている。1995年の阪神・淡路大震災から16年を経て、2011年に勃発した東日本大震災は超弩級の複合災害であった。問題の重大さは、それを地震活動のフィナーレと見ることができない点にある。

ここで三点に留意したい。

第一に、過去の災害から教訓を学ぶ必要があるが、直近の強烈な災害ばかりに認識を支配されすぎてはいけない。

「将軍たちは前の大戦を戦い、外交官は前の講和会議を交渉する」と揶揄されるのと同じく、大自然も絶えず人々の想定を裏切り、新たな奇襲攻撃をかけてくる。安定した認識の視座を得るには少なくとも三つの主要なケースを視界に収め、全体的な認識を得る必要がある。ゆえに、近代日本の代表的大震災である関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災の三者を検討の対象としている。この三大震災を検討し、今後も列島に生起する多くの震災に対する知的準備としたいと思う。

第二に、大自然は天災の配分において平等主義者ではない。大地は平穏期と活性期の時期的な交互性を生理としている。

第三に、神戸に始まる地震の活性期は、東日本大震災をもって終わりを迎えたか否かが大きな問題である。

今後も、東日本大震災の広大な領域とその周辺に余震が頻発するだけではなく、この大地の大きな動きが遠く離れた地域にまでひずみを拡大し、各地が抱える断層や火山の動きを活発化する作用が憂慮される。

これらの三つの点で専門家が気にかけるのが、貞観地震シナリオと幕末安政年間の災害ラッシュである。貞観地震はこの度の東日本大地震と似たものであり、東北地方に大津波を起こし、その後、日本各地の断層が動いたのである。我々は、M9.0の東日本大震災を中心に、16年前の阪神・淡路大震災、今後20~30年間に引き続き起るかもしれない大災害と合わせて、地震活性期の中でも格別に規模の大きいものの最中に、めぐり合わせている。

地震発生のメカニズムに関する研究は、近年急速に発展しているが、地震についての科学的データの蓄積はまだ薄い。とはいえ、歴史文献研究を融合させることにより、例えば関東大震災は、一つの大地震のように思われて、6~7分にわたり連続して起こった三つの地震による災害であることが明らかとなった。

### 2. 日本人の自然観・天災観

日本人は、西洋人と違い自然は対峙すべき敵ではなく、自然を畏敬し共生するものとした。日本列島の住人が天災に対処する基本姿勢とは、豊かな自然の恵みに包まれて生きるために、台風一過、津波一過、翌朝また槌音高く、同じ場所に、同じ木と草と土の家を再建するといったものである。国と社会の対処はそれでは済まない。民と政府の間には、実際の調印式はなくても契約関係がある。民は政府に大きな特権を与える。つまり、政府が国民の安全を守り、福利を増進するかぎりにおいて、排他独占的に微税権と軍事力を許す。

人類は長く農耕生活を経験してきたが、農耕社会は、天災から農地と農民を守らねばならず、治水と灌漑を必要とする。治山治水の能力が民の経済的生存の保証であり、権力の正統性の重要な要素ともなった。